

⑦ 明十町の三原さん

【歡喜の余滴】

231

昭和二年 十二月 十八日

明十町の三原さんが 午前六時頃から久しい間の煩悶を訴えて来られた。どんなに話しても聞き入れて下さらない、理屈は判っているが信じられない、涙を流し胸を叩きながら、「先生 他が変わった教え方はありませんか」

「唯より他が変わった事はありません、別な事を教えたなら別のお浄土に行きます」 「どうしたら此の胸が承知するでありましようか」

「知りません」

「それでも先生は命懸けで教えてやると仰ったではありませんか」

「私の持つているお浄土なら直に許しても上げましようが、善知識に縋っていては詰まりません、其の泣き泣き墮ちるのが如来の一人子であります」

「どうしても判りません」と言って苦しい胸を抱えて 十一時半頃帰宅された。

午後一時からは婦人会の説教、の講和は三原さん一人に專注した、喉が破れて倒れるか、石のような心が動くか 二つに一つの命懸けであった。

其の講演の真最中声を挙げて泣き出し 「判りましたく、御院家さん 声が出なくなるから止めて下さい、何か明かに親に返事して貰おうと待っていました、成り切らない悪性の儘が 御親の勅命通りに成れたとは不思議でございます」と 叫んでくれたのには、思わず涙に咽んで暫くは講演が出来なんだ。 並んでいた人々は涙流して合掌した、其の真摯な態度、敬虔な姿は百千万の言辞よりも遙かに勝れている。